

六、壺長庵一夜の対決

江戸時代も半ばを過ぎた天明二年（一七八二）のこ
と、冬もま近いある日の夕方、沂風と祥然という二人
の旅のお坊さんが、篠栗宿の本陣の平井家を訪れま
した。二人はともに俳諧の宗匠（先生）でした。

俳諧を優れた芸術にまで高めたのは、ご存知のよ
うに松尾芭蕉ですが、芭蕉が没して百年、それをきつ
かけに芭蕉のもとでの精神にかえれという運動がおこ
り、二人はその運動を九州方面にも広めるために、は
るばる京都からやってきたのです。

当時の本陣の主は福岡藩士平井清次郎、俳号を
其両（菅の小蓑集）という俳書を出版するな
どして、この地方では有名な俳人でした。旅僧たちが
喜び迎えられたことは、いうまでもありません。其両
は二人を本陣屋敷の壺長庵と名付けた離れに招き
入れて、その夜、さっそく俳諧の座をひらきました。



一座したのは、宗匠二人をはじめ其両とその長男の
末竜、それに地元の俳人路々の合わせて五人でした。
旅僧二人が遺した『宰府日記』という旅行記に、そ
の夜の俳座で詠まれた半歌仙十八句がすべて記され
ています。芭蕉復興運動の本場からやってきた宗匠
たちと、まだ草深い田舎にすぎなかつた篠栗の地元
俳人たちの対決という構図でそれを読んでみます
と、少なくとも其両は一步もひけを取ってはいませ
ん。ところがそれに対して宗匠二人は、離れわざとも
いえるような見事な技法を操って、地元俳人たちを
圧倒しようとしています。

その詳しいことは、『壺長庵句会前後』という冊子
にまとめていますので、興味のある方は、どうぞ町歴
史民俗資料室にお立ち寄りください。

篠栗宿本陣（御茶屋）あとの記念碑（上町区平井邸門前）。
壺長庵は、この本陣の一隅にありました。